

「宝が隠されている畑」

マタイによる福音書 13章 44節～46節

説 教 軽 込 昇 牧 師

30歳の時、ヨルダン川で主イエスは洗礼をお受けになり、神の国を宣べ伝え始められます。3年近くの伝道は、ほとんどガリラヤでなされました。預言者は誰も自分の故郷では敬われないと言いつつも、ほとんど、故郷で語られたのです。主は、全世界の人々に、ご自身のことを知ってもらいたいと願われ、今、ここにおられる皆様にも、そのように願っておられます。

主は、譬え話を用いてご自分が何のために来られたかをお示しになりました。そもそも、譬え話は難しいことを分かりやすく易しく言うものですが、主イエスの語られた譬え話は分かりにくいものが多いのです。後になって、そうだったのかと腑に落ちるものも多かったのです。譬えを用いて、主イエスと生きるということが語られているのです。

今日の聖書の箇所には、畑に隠されている宝のことや真珠のことが記されています。発見した者が、がむしゃらに手に入れようとする。その動作が大切なのだと記されています。当時、パレスチナの状況下において、宝を畑に隠しておくということが行われており、畑を耕すと宝が隠されていた、などということがありました。当時、このような宝が見つかった場合、土地の所有者の物とみなすルールがあったのでしょ。だから、見つけた者の執念と熱心さが付きまといま。主イエスがベツレヘムに生まれてから十字架にかけられるまでの一生そのものが、そこになぞらえられています。

「求めよ、そうすれば、与えられるであろう。捜せ、そうすれば、見いだすであろう。門をたたけ、そうすれば、あけてもらえるであろう。」（マタイによる福音書7章7節）。この主イエスの言葉は、主イエスが、私たちに熱心に求めよと言っておられるのだと思っていました。しかし、これは主イエスご自身が発せられた言葉であって、“あなたの中に宝がある！”、“なんとかして手に入れたい！”と、言ってくださっているのです。

主イエスという宝を私たちが発見することと、主イエスが私たちに発見してくださるという、この二つは切り離すことができません。だからこそ、熱心に主イエスが私たちに発見し、自分のものにしようとして熱心に走り回ってくださったのです。主イエス・キリストこそ天国なのです。

発見した者には喜びがあります。

ルカによる福音書15章に三つの譬え話があります。迷い出た羊が発見された、なくなった銀貨が見つかった、放蕩息子が帰ってくる。ここにも喜びが記されています。放蕩息子の話の中で兄が登場しますが、この兄が弟と和解したということがあれば、本当の喜びがあるのに…と思わされます。

神は全てのものを売り払ってでも、私の中に発見して下さったものがあります。これこそが、神の国、天国です。神はどこまでも追い求めてくださるのです。神は、畑の中に転がっているつまらない石ころを発見されます。どんな高価な真珠であっても、目利きの者が発見しなければ、それは石ころのままです。この宝も、真珠も、私たちです。私たちも、それが宝だと気づきません。しかし、神だけが、私たちの中に、持ち物を売り払ってでも手に入れたいと捜してくださる宝を、発見されるのです。

人間は土の塵にすぎません。しかし、そこに神が命の息を吹き込まれました。なんの力もない者であっても、神によって価値ある者とされたのです。神が、あなたは宝であると仰っているのに、私たちは、それを受け入れられないのです。私が宝であると、私が認めようとしません。私の中に、私は石なのだと言わぬが、私たちが自身こそ、とんでもなく難しい自分を相手としているのです。失敗や人間関係の崩れが生じたとき、私たちはそんな者ではないという思いが湧き出てきます。

しかし、そんなときに見上げるべきお方は、私たちに宝としてくださるお方です。私たちに宝とするために十字架にまでかかってくださった主イエスこそが、私たちが宝であると示してください。神の前で、あなたはどのように立つのでしょうか。主イエスは、主の前におすおす立つ私たちを受け入れてくださるお方です。そと主イエスの衣に触れた、長血を患った女性のように。あなたは、既に主イエスによって発見されています。主イエスの前に、おすおすと手を伸ばし平伏し、立たせてくださいと願う者であります。